

「あなたと働くその日まで」

小竹
理央

登場人物

中野向日葵（なかのひまわり）（19）大学3年生

（21）

神田茅萱（かんだちがや）（21）会社員

（23）

駒井満里奈（こまいまりな）（25）会社員

（28）

福田満（ふくだみつる）（54）部長

（59）

岸田勇樹（きしだゆうき）（21）大学院1年生

土井敏則（どいとしのり）（21）大学院1年生

根本洋子（ねもとようこ）（21）大学3年生

就活支援センター職員

○大学・道路

T「2025年7月」

中野向日葵（21）、自転車を押して
“上を向いて歩こう”を鼻歌で歌いながら歩いている。

メール着信音がして携帯を取り出すと
“コンサルティングファーム

『Force』”からメールが届いている。

向日葵の声「ついに、その日はやって来た」

メールには“先日はお忙しいところ、
当社の面接にお越しいただきまして、
誠にありがとうございました。選考の
結果、”と記載がある。

向日葵、前を向き速いスピードで呼吸
を繰り返す。

向日葵の声「就活を始めたのは1年前」

○大学・就活支援センター

T「2024年7月」

向日葵、就活支援センターの職員と話をしている。

向日葵「やりたいことは何もないんです。大学もここまで単位だけ落とさないようにと思って最低限の力でやってきました。だからここに来て行きたい会社決めろって言われても、ピンと来ないんです。私、どうしたらいいですか!？」

職員「やりたいことが無いとなると：業界の絞り込みや、企業を絞っての対策ができません。ですので、まずはやりたいことを探すことからスタートするのがよろしいかと。中野さんご自身が今まで興味があったことや、やりがいを感じたこと、あとは好きなことなど教えていただけますでしょうか？」

向日葵「んーと：好きな人なら：」

× × ×

回想

○大学・校門

T「2022年4月」

多くの学生が新入生向けにサークルの
チラシを配っている。

向日葵（19）、圧倒されながらもチ
ラシを受け取る。

向日葵、人に押されて倒れる。

神田茅萱（21）、向日葵の前で跪き

手を伸ばす。

茅萱「大丈夫？立ち上がれる？」

草木が風になびく音がする。

向日葵「ありがとうございます」

向日葵、茅萱の手を掴み、立ち上がる。

二人はしばらく見つめ合う。

× × ×

回想戻り

職員「中野さん？中野さん？中野さん！」

向日葵「はい！何ですか？」

職員「今日はここまでにしましょうか。こち
ら、就活に役立つと思うので、ぜひご
活用ください」

向日葵「はい」

職員、OB・OG就職先一覧を向日葵に差し出し、向日葵はそれをまじまじと見つめる。

○同・食堂

向日葵、メロンパンを食べながらもらったOB・OG就職先一覧を見ている。

向日葵「どこも凄い会社ばっかだなあ」

向日葵、あるページで手を止める。

向日葵「ん…？あ！これだ！」

向日葵、急いで食堂を飛び出す。

○会社・オフィス

社員たちが働いている。

茅萱（23）、電話している。

茅萱「先日はどうもお世話になりました。いえいえ、こちらの方こそ急な依頼にも関わらずご対応いただき頭が上がりま

せん。今後とも何卒よろしくお願い致します」

駒井満里奈（25）、後輩と話している。

満里奈「締め切り期限は1週間後の朝10時です。くれぐれも遅れないようにね」
部長・福田満（54）、オフィスに入って来る。

福田「全員注目！今月は新規案件3件、現在進行中の案件も合わせて15件同時に進める。気を緩めず、着実にこなして行くぞ」

社員一同「はい！」

満里奈、茅萱のもとへ来る。

満里奈「茅萱君、ちょっといいかな？」

茅萱「満里奈さん。はい、すぐ行きます」

茅萱のもとに向日葵からの連絡が来る。

茅萱、メッセージを開く。

茅萱「中野向日葵？誰だっけな…ん？もしかあの中野？」

満里奈「茅萱君？取引先からの連絡か何か？」

茅萱「なんでもありません。今行きます！」

向日葵からのメッセージに“茅萱先輩、お久しぶりです！元気ですか？今度茅萱先輩の会社についてお伺いしたいのでカフェで会いませんか？”と書いてある。

○居酒屋・（夜）

茅萱、満里奈を含めた社員たちで飲み会をしている。

社員一同「乾杯！」

茅萱、飲み物に口を付けようとするが携帯の通知音が鳴り、気にする様子を見せる。

満里奈「さっきの人？」

茅萱「あ、まあ。でも気にしなくて全然平気ですから。満里奈さん、サラダ食べますか？」

満里奈「うん、ありがとう」

もう一度通知音が鳴る。

茅萱「ちよっとすみません」

茅萱、立ち上がり、お店の隅に行く。

茅萱「忙しいところだったのに。なんだよ」

茅萱、携帯を見ると向日葵からの連絡が溜まっている。

茅萱「またこいつかよ」

茅萱、携帯を操作し、

茅萱の声「今度の土曜、渋谷のカフェで会おう」

とだけ打って席に戻る。

○向日葵の部屋・（夜）

向日葵、携帯の通知音が鳴り、飛び起きる。

向日葵「茅萱先輩！？今度の土曜、渋谷のカフェで会おうだって…うそ…やったー！茅萱先輩とデート、デート！うふふ。うふふふ」

向日葵、枕を抱きしめて嬉しそうに転がる。

○カフェ・店内

向日葵と茅萱、向かい合って飲み物を飲んでいる。

向日葵「茅萱先輩、今日は来てくれてありがとうございます！しかもコーヒーまで奢ってくれるなんて、なんかときめいてしまいました。これ美味しいです！あ、そうだ、私最近コーヒーに目覚めて、家ではもっぱら…」

茅萱「それで、要件は何？」

向日葵「あ！そうでした！要件ですよ。今私、就活してるんですけど、先輩がたまたま私が入社したい会社に就職したって知って、コツを教えてもらえたらなあなんて思ってた」

茅萱「コンサル、興味あんの？」

向日葵「こんさる？ああ、先輩の会社は大手
コンサル企業ですもんね。コンサルに
ついてはまだ勉強中です！勉強中って
言っても始めたばかりなのでまだまだ
何もわからないです！」

茅萱「Consulting。顧客から相談を受けて問
題解決から助言・指導などをおこなう
仕事。中野知ってた？」

向日葵「：それは知りませんでした。すみま
せん。でも、これから！」

茅萱の声「俺は中野向日葵の考えなしに突っ
走る直観的な所が嫌いだ。2年前から
中野は何も変わってない」

× × ×

回想

○大学・校門

T「2022年4月」

茅萱の声「大学生の時、中野はその性格から
陰で“嵐女”と呼ばれていた」

茅萱（21）が友人と歩いている。

向日葵（19）、サークルのチラシを
持って歩いていると他の学生に押され
て倒れる。

茅萱、向日葵の前で跪き手を伸ばす。

茅萱「大丈夫？立ち上げれる？」

向日葵「ありがとうございます」

茅萱の声「この出来事をきっかけに、その後

中野は俺を付け回した」

○大学・食堂

茅萱、昼食を食べていると背後から気

配がして振り向く。

向日葵、さっと隠れる。

茅萱の声「そして告白もされた」

○大学・中庭

新入生らしい格好の向日葵がいる。

向日葵「一目惚れしました！付き合ってください

さい！」

○茅萱の家・玄関

浴衣姿の向日葵がいる。

向日葵「夏祭り行きたいので。付き合ってください！」

○同・玄関

トナカイのコスプレをした向日葵がいる。

向日葵「明日はクリスマスです！付き合ってください！」

○大学・教室の入り口

鏡餅を持った向日葵がいる。

向日葵「あけましておめでとうございます！付き合ってください！」

○同・教室の入り口

チョコレートを持った向日葵がいる。

向日葵「バレンタインなので、付き合ってください！」

茅萱の声「たった1年で5回も。俺は中野のことは何も知らない。そして中野も俺のことを何も知らない。何も知らない他人にそこまで熱くなれることが甚だ疑問だ。そして俺は5回とも中野を振った」

茅萱「ごめん。中野のことは後輩としてしか見られない」

× × ×

回想戻り

カフェ 店内

茅萱「（小声）さすが嵐女」

向日葵「はい？」

茅萱「どうせ何も考えず俺がいるって理由でこの会社入りたいと思ったんだろ」

向日葵「…それは」

茅萱「社会人は大学生の就職ごっこに付き合っ
ていられるほど暇じゃないんだ。真
剣じゃないならこれ以上俺は中野をサ
ポートしない。忙しいから。それじゃ」

茅萱、立ち上がり出口に向かう。

向日葵「茅萱先輩：！」

○会社・オフィス

茅萱、電話をしている。

茅萱「ありがとうございます。失礼致します」

茅萱、電話を終える。

福田と満里奈、3枚の紙を並べ悩んでいる様子。

満里奈「3人とも経歴、受け答え共に同じレベルですよね」

福田「インターン生、最後の一人ねえ：候補は」

茅萱、福田と満里奈の前を通る。

福田「井上涼子、須貝昇、そして中野向日葵か」

茅萱、向日葵の名を聞き驚いて二人に近寄る。

茅萱「部長、今何て？」

福田「井上涼子？」

茅萱「ではなくて最後の一人です」

福田「中野向日葵」

茅萱「嘘だろ」

福田「神田君の知り合いか？なら優秀に違いない」

茅萱「いえ、そうとは限らないのでは…」

満里奈「よく見たら、茅萱君と大学も研究室も一緒ね！これは期待できますね、部長」

茅萱「しかし彼女をインターンにするのはおすすめできません」

福田「何か欠点でもあるのかい？」

茅萱「欠点は…一途すぎる所です」

福田「っはっは。ならますます会社にうってつけだ。会社を一度好きになればそう簡単に辞めない優秀な社員になりそうじゃないか。彼女で決まりだな」

茅萱「いや、あの」

満里奈「彼女をインターンとして迎える方針で話を進めますね」

福田と満里奈、各自作業に移る。

茅萱「ちょ、えー」

○向日葵の部屋・（夜）

向日葵、机に突っ伏している。

× × ×

回想

カフェ 店内

茅萱「どうせ何も考えず俺がいるって理由で
この会社入りたいと思ったんだろ」

× × ×

向日葵「はぁ：絶対嫌われた：」

向日葵、携帯に通知が来て開く。メールには“選考の結果、インターンに参加いただくことになりました。”と書いてある。

向日葵「え！合格！？うひゝ！やったやった
やった！チーム向日葵！インターン
では名誉挽回目指して全身全霊、頑張
るぞ！オー！：あ、もしかして」

向日葵、携帯でメッセージを打つ。

○茅萱の部屋・（夜）

茅萱、髪をタオルで拭いていると向日葵からメッセージで“茅萱先輩、私、インターン受かりました！”と来る。

茅萱「知ってるよ」

続けてメッセージで“もしかして茅萱先輩が推薦してくれてたり？”と来る。

茅萱「してない！」

続けてメッセージで“向日葵、びっくりです！”と来る。

茅萱「俺はがっかり！」

茅萱、タオルで顔を覆い、アーと叫ぶ。

○会社・入り口前・（朝）

T「2024年12月」

向日葵、入口前に立っている。

向日葵「わあ、おっきい！社員さんもみんなかっこいい！向日葵、頑張るぞ！オー」

○同・会議室

土井敏則（21）、岸田勇樹（21）

根本洋子（21）を含むインター生
が着席している。

向日葵、入室する。

満里奈、会議室の前の方に立っている。

満里奈「中野向日葵さん？好きなところへ
どうぞ」

向日葵、小さく会釈しながら席に着く。

満里奈「少し早いですが全員揃いましたので

コンサルティングファーム『Force』
の冬季インターンを開始します。今回
のインターン全般を担当します、駒井
満里奈です。よろしくお願いします」

向日葵「満里奈さんか…カッコいい…」

満里奈「早速ですが、皆さんには事前に割り
振った4人一組のチームに分かれてい
ただきます。各自チームの席に移動し、
自己紹介をしてください」

向日葵を含めたインターン生は割り振りを確認する。

向日葵「私は、チームBね」

× × ×

向日葵が座っていると土井、岸田、根本が後から席に着く。

岸田「よろしくお願いします」

向日葵「よろしくお願いします！」

根本「まず誰から自己紹介しますか？」

向日葵「（立ち上がり）あ、それじゃあ私から！皆さん初めまして！21歳、中野向日葵です！好きなことはご飯を食べることと寝ることです！嫌いなものは幽霊です！よろしくお願いします！」

メンバー、苦笑いしつつ拍手する。

岸田「なんか、元気だね。よろしく、中野さん。それじゃ、次は俺が。はじめまして。京岳大学、社会学部、院生の岸田勇樹です。大学では主に行動経済学分

野の研究をしています。少しでもみんなの役に立てれば幸いです。よろしく」

メンバー、拍手する。

向日葵「（小声）行動：経済：学」

土井「次は僕ですね。えー、東峰大学、理工学部、土井敏則と申します。現在、大学院1年生」

向日葵「（小声）また院生：？」

土井「ざっくり言うとAIに関する研究をしていて、趣味はパソコンの解体、改造。その他にも壊れた機器の修理が好きで休日にはちょこっとやっています。よろしくお願いします」

メンバー、拍手する。

向日葵「（小声）すごい：」

根本「最後は私かな？はじめまして。帝星大学、経済学部所属の根本洋子です。今は大学3年生です」

向日葵「（小声）同じ：良かった」

根本「ただ、去年までアメリカで留学して
て年は1個上です。このインターンは
楽しみながらできたらいいなと思っ
ます！よろしくお願いします」

向日葵「（小声）帰国子女かあ」

満里奈、音を鳴らし注目を集める。

満里奈「自己紹介は終わりましたか？では今
回のテーマを発表します…」

向日葵「（小声）完全に出だし間違えた…」

○同・食堂

チームBのメンバー、昼食を食べてい
る。

岸田「今回のインターン、俺が調べたサイト
によると1位になったチームは書類選
考と一次面接免除で二次面接から選考
に進めるらしい」

向日葵「そうなんですか！？じゃあ1位は入
社への近道ってことですか？」

根本「私もここに入社した先輩から聞いたこととあります。実際のところどうかかわかりませんけど」

土井「それが本当なら1位以外意味がありませんね。これは必ず1位を取らねば」

向日葵「みんなで絶対、1位取りましょう！」

岸田「すごいやる気：中野さんはどうしてこの会社に入りたいの？」

向日葵「それは、好きな先輩がいるからです。

私は大好きな茅萱先輩に会いたくてここにいます」

根本「えっ志望理由が好きな先輩って：」

岸田「俺には理解できないなー。その考え」

向日葵「あ！来ました！その先輩です！」

茅萱、食堂に入ってくる。

向日葵、立ち上がり物陰に隠れながら

茅萱を見つめる。

土井、岸田、根本、立ち上がる。

岸田「中野さん、俺たち先行くから」

向日葵「はい！また後で会いましょう！」

岸田「みんな、行こう」

岸田と根本、少し離れたところで立ち止まる。

根本「私あの子苦手かもです。インターンを遊びだと思ってますよね」

岸田「こっちは人生かかってるっていうのに。俺、ああいう人にはなりたくない」

○同・オフィス

土井、根本、向日葵が椅子に座り、岸田がホワイトボードの前に立っている。

岸田「このインターンのテーマは売上に悩む米農家への新規販売方法を提案すること。みんな、テーマを見て思いついたことを何でも言ってくれ」

向日葵「米農家か…うーん」

根本「お米と言えば日本食を象徴する代表的な食べ物ですよ。私、アメリカにいらるときでもお米食べたくてお米パーティーしたら海外の友達にも意外と

大人気で！だから、日本に限らず海外に向けてプロモーションをするのはどうでしょう？」

岸田「確かに、お米は日本というイメージが強いから国内に販売エリアを限定しがちだけど、それなら一気に売り上げを上げられるかもしれない」

向日葵「なるほど：」

土井「今の話を聞いていて思いついたのですが、世界では空前のA Iブームが来ているのでA Iの要素もプロモーションに足すのはどうですか？私の専門ですので、力になれるかと」

岸田「土井さん、良いですね！古風なイメージのお米と最新技術の融合でシナジー効果がありそう」

向日葵「たしかに：しなじーですね：」

岸田「ああそうだ、行動経済学には“希少性の原理”というものがあって、希少価

値の高い商品ほど顧客は買いたくなつてしまいうらしいです」

向日葵「ほう…」

岸田「だから日本のごく限られた地域でしか採れないという希少性を前面に押し出すといいかもしれません」

根本「それいいかも！…中野さん。中野さんはどう思いますか？」

向日葵「え、私？あ、えーとあの、海外向けでAIを使って希少性を売りにするんですよね？…いいと思います」

岸田「じゃ、これで決まりですね。次に市場調査と…」

茅萱、通りがかりに向日葵の様子を見るが向日葵は浮かない顔をしている。

○同・廊下

向日葵、暗い雰囲気で歩いている。

茅萱、向日葵の後ろから満里奈と来る。

茅萱「わ：あいつだ。満里奈さん、もう少し
ゆっくり行きませんか？」

満里奈「うん、そうね」

向日葵、エレベーターに乗り扉が閉まる。
る。

茅萱、エレベーターの前に来て階層表示を見る。

茅萱「ん？最上階？：まさかあいつ！すみません、俺用事できたんで、先戻ってください」

茅萱、急いでエレベーターの上を押し、エレベーターに乗る。

満里奈「え？ちよつと！どこ行くの！」

○同・屋上

向日葵、手すりを握って下を見ている。

茅萱、ドアを勢いよく開け外に出る。

茅萱「中野！早まるな！」

向日葵「ん？茅萱先輩！？」

茅萱、向日葵に近寄り勢いよく肩を掴む。

茅萱「中野！こんなところで何やってんだ！
どんなに劣等感持って苦しくても、どんなに自分が不甲斐なくても死ぬのはダメだ！ただのインターンごときで人生棒に振るようなことするなよ！」

向日葵「茅萱先輩、どうしてここに？私、死ぬうとなんてしてません。ただ風に当たろうと思っただけです！」

茅萱「え？」

向日葵「もしかして茅萱先輩、私のこと心配してここまで来てくれたんですか？」

茅萱「俺は別に：そういう訳じゃ」

向日葵「嬉しい！！今私、すごい嬉しいです！やっぱり思った通り。茅萱先輩って優しいですね」

茅萱「やっぱりって何だよ。俺のこと何も知らないだろ」

向日葵「はい：でも茅萱先輩の顔とか表情と
か見てると優しい人だってわかります。
王道優しいって感じじゃないですけど、
そこも好きです」

茅萱「あっそ」

向日葵「茅萱先輩、私今、決心しました！」

茅萱「…？」

向日葵、設置してある少し高い台に駆け
寄り、そこに立つ。

向日葵「茅萱先輩！」

茅萱「ん？」

向日葵「（大声で茅萱に向かって）私、絶対
他のチームに負けません！私には茅萱
先輩と働きたいっていう最強モチベ―
ションがあるので！」

茅萱「何言ってんだあいつ」

向日葵「あ、もうお昼休み終わっちゃう。行
かないと！失礼します！」

向日葵、急いで屋上の出入り口へ向か
う。

茅萱「相変わらず“嵐女”だな」

○同・オフィス

チームBのメンバー、話し合いをして
いる。

岸田「あとは発表資料の作成か。誰かやりた
い人いる？」

向日葵「誰もいないなら、私がやります！」
根本「発表は私がやります」

岸田「あ、美味しいところ。俺も面接官に印
象付けたいから半分やっていい？」

向日葵「（小声）あ：私も：」

土井「僕もやりたいです」

岸田「3人でやると1人5分かちようどいい
な。じゃあ発表は3人でやろうか」

向日葵「：そうですね！」

満里奈、コーヒーパー手に大きい箱を重
たそうに運んでいる。

向日葵「あ、満里奈さんだ」

満里奈がいる反対側から他の社員が歩いて来る。

向日葵「あのままじゃ、ぶつかるんじゃない」

向日葵、咄嗟に満里奈に向かって走る。

向日葵「満里奈さん、よけて！」

向日葵、満里奈を引き寄せ社員とぶつかるのを回避するが満里奈がコーヒーを落として向日葵のシャツが汚れる。

満里奈「中野さん、ごめんね」

○同・休憩スペース

向日葵と満里奈、椅子に座っている。

満里奈「完全に落ちなくてごめんなさいね。

新品みたいだけど大丈夫？」

向日葵「私のことは気にしないで下さい！なんの問題ありません！むしろハート型のシミ、可愛いです！」

満里奈「あっはは。あなた面白い子ね。インターンはどう？順調？」

向日葵 「インターンはちよつと苦労してて：私分かったんですけど、“今までなんとなく頑張ってきた私”と“人生かけて頑張ってきた人”とじゃレベルが違うんです。その差って今の私がどんなに頑張っても越えられるようなものじゃないんじゃないかって、そう思います」

満里奈 「あつはは。なにしかたこと言ってるの！人生もインターンもここから、でしよ？中野さんが今までどうだったかは知らない。けど、今頑張ってるかどうかはわかる。それに私、中野さんコンサル向いてると思うなあ」

向日葵 「私がですか？」

満里奈 「コンサルってお客様が満足するかどうかがすべてなの。どんなにアイデアがすごくても要望に合っていないと意味がない。その点、中野さんはきつとお

客さんのことを考えた案をいっぱい出せるんじゃないかな？」

向日葵「私、誰かの役に立つのは好きです！
とても！」

満里奈「うん、さっきも助けてくれたし、そうじゃないかと思った。中野さんって下の名前、なんて言うんだっけ？」

向日葵「向日葵です」

満里奈「向日葵か：ピッタリな名前。さっきはありがとう。おかげで助かった」

向日葵「いえ、私で良ければいつでも！」

○同・オフィス

向日葵、チームBのメンバーに向けて発表資料を説明している。

部長・福田、その様子をコーヒー片手に見ている。

茅萱、福田の横を通りかかる。

茅萱「部長、何見てるんですか？」

福田「あのインターン生。インターンとして
選ばれるのは最後だった割によく頑張
ってるよ」

茅萱「ああ、中野ですか？あいつのことだし
色々やらかしてるんじゃないですか？」

福田「詳しくはわからんが、チームのために
できることをやってみたいだぞ。あ
そこのチームは優秀な学生が多いと駒
井さんから聞いてる。食らいついてる
だけでも大したもんだ」

茅萱「：他に何か知っていることがあります
か？中野について」

福田「そうだな：あと毎日の日報には収まら
ないくらいびっしり内容を書いてる。
コンサルで役立つポイントを書いて送
ってくるのは、インターンの中でも彼
女くらいだな」

茅萱「そう：ですか」

○同・廊下・（夜）

向日葵、眠そうに歩いている。

満里奈、エレベーターから出てくる。

満里奈「向日葵ちゃん？こんな遅くまで残って何やってるの！？」

向日葵「あ、満里奈さん！こんばんは。まだ準備が終わらなくて。私がチームのみんなの足を引っ張る訳にはいけないので」

満里奈「そんな調子じゃ体調崩すわよ。ほら、ここ座って」

向日葵「ありがとうございます」

満里奈と向日葵、横並びでベンチに座る。

向日葵「満里奈さんはこの時間までお仕事ですか？」

満里奈「私は印刷の作業が残ってて。あっちは。自分は残業してるのに、インターン生には早く帰れなんて言う資格ないか。そういえば向日葵ちゃんは大学で…」

向日葵、満里奈の肩に頭を乗せて寝る。

満里奈「向日葵ちゃん？向日葵ちゃん？寝ち

やったか？」

茅萱、そこを通りかかる。

茅萱「満里奈さん」

満里奈「シー！今寝たところだから」

茅萱、向日葵を起こさないように静かに向日葵の横に座る。

茅萱「嵐女、疲れて寝たか」

満里奈「なんか、この子見てると入社したての頃の茅萱君思い出すなあ」

茅萱「え？俺こんなじゃなかったですよ」

満里奈「本人は気付いてないかもしれないけどあの頃茅萱君本当に一生懸命でなんにでも全力投球だった。それで居酒屋ではよく私の肩で寝てた」

茅萱「ちょ、やめてくださいよ、恥ずかしい」

満里奈「あれ、顔赤くなってる」

茅萱「ちょっ、見ないでください」

満里奈「うつそぴょーん」

茅萱「満里奈さん、楽しんでませんか？」

満里奈「うん」

茅萱と満里奈、楽しそうに会話する。

向日葵、薄目で二人が話しているのを聞いている。

○同・入り口・（朝）

T「成果発表当日」

茅萱と向日葵、お互いに気づく。

茅萱・向日葵「あ」

茅萱「おはよう、中野」

向日葵、昨日茅萱と満里奈が楽しそうに話していたのを思い出す。

向日葵「（下を向いて）おはようございます。

それでは」

向日葵、早歩きでエレベーターへ向かう。

向日葵「だめ、今は発表に集中、集中……！」

茅萱「なんだあいつ」

○同・会議室

満里奈が司会の位置に立ち、インターン生全員が椅子に座っている。

福田、茅萱を含む社員は後方に座っている。

満里奈「いよいよ今日は最終発表です。インターンの皆さん、心の準備はできていますか？発表はチームAから順に行います。それではチームAの皆さん：」

向日葵「大丈夫。ここまでやって来たんだから1位になれるはず」

茅萱、向日葵のことを見ている。

× × ×

チームAの学生たちが発表している。

学生「ご清聴ありがとうございました」

チームAの学生たちが席に戻る。

満里奈「チームAの皆さんありがとうございました。続いてチームB、発表お願いします」

岸田「はい」

岸田、土井、根本が登壇する。

向日葵の声「そして私たちの発表が始まった。

岸田君、土井君、根本さんは自信に満ち溢れた発表を私の代わりに完璧に行った。長いようで短かったインターンもこれで終わり。あとは結果を待つのみだ」

岸田「これにてチームBの発表を終わります。ありがとうございます」

会議室全体に拍手が鳴り響く。

× × ×

他のチームが発表している。

向日葵の声「その後も各チームの工夫を凝らした発表が続いた。そして私たちインターンの成果発表は全て終了した」

最終チームが席に戻る。

満里奈「これで全ての発表が終了しました。

皆さん、ここまでお疲れ様でした！それではこれより社員による選考に入り

ます。皆さんは30分間の休憩となりますので25分にはお戻りください」

岸田、土井、根本が三人で話を始める。

向日葵は輪の中に入れてず携帯を見る。

× × ×

満里奈「お待たせ致しました。それでは福田部長から1位から3位までのチームを発表していただきます。福田部長、お願いします」

福田「皆さんここまでご苦労さまでした。それでは、1位から3位までのチームを発表します。第3位は：チームF！おめでとう！」

全員拍手する。

福田「続いて第2位は：チームC！」

全員拍手する。

福田「そして栄えある第1位は」

向日葵「お願い：お願い：お願い：」

福田「チームB！！」

向日葵の声「その瞬間、鼓動が高鳴って、頭が熱くなった。周りの音が遠くなつて、周りの物がスローモーションみたいに見えた」

拍手が会議室全体に鳴り響く。

岸田、土井、根岸はそれぞれ喜んでい
る。

向日葵「良かった：心臓爆発するかと思った」

向日葵、後ろを振り向くと茅萱と目が
合う。茅萱、グッドサインを見せる。

○同・廊下

岸田と根本、廊下で立ち止まっている。

茅萱、2人がいる反対側の廊下からや
ってくる。

根本「一位とれて結果オーライだけど、正直
中野さんは何もしてないのに書類選考
と一次免除なの悔しいです」

茅萱、根本の言葉を聞き二人に見えな
いところで立ち止まる。

岸田「それは俺も思ってた。頑張る奴がバカ
を見るっていうか、利益横取りされて
る気分？好きな人追いかけて来てつい
でに特急券まで手に入れて、ちゃっか
りしてるよな、中野さん」

向日葵、茅萱に向かって歩いてくる。

向日葵「茅萱先輩！宣言通り一位取りまし
た！」

茅萱「それはいいからこっち来い」

向日葵「え？」

茅萱、向日葵の腕を掴んでその場を離
れようとする。

根本「中野さんってほんとずるい。私たちの
おかげなのに」

向日葵、根本の言葉に反応してその場
に留まる。

岸田「うん、俺も同感。けどもう終わったこ
とだから、仕方ない」

茅萱「ちよつと来い」

茅萱、向日葵の腕を引っ張り、向日葵を連れていく。

○同・休憩スペース

茅萱、飲み物を向日葵に差し出す。

茅萱「…発表、お疲れ」

向日葵「ありがとうございます…」

茅萱「さっきのあれは気にすんな。結果は1位だったわけだし」

向日葵「（笑顔で）良いんです、私は」

茅萱「え？」

向日葵「みんなが私のことをああ言うのは分かります。だって事実だし！好きな人追いかけて来た奴が甘い蜜吸ってっと思いますよ、誰だって」

茅萱「よせよ」

向日葵「私、アイデア出しの時、何も出てこなかったんです。他の人はそれぞれの武器で戦ってるのに私には何も無かった。発表だって他の3人は堂々として

て、自信があつて。でも私はそんな風にできないなあ、凄いなあつて思つてただけなんです。だからこうなつて当然ですよ」

茅萱「じゃあ中野はこのインターン中何もしてなかったんだな？」

向日葵「え？」

茅萱「頑張ってみんなの話聞いたり、残業までして資料作つてたのも何の意味も無かつたんだよな？」

向日葵「いや、でもそれは」

茅萱「いやつて何だよ。本当に意味が無かつたんなら否定は出てこないだろ。…つまり中野は頑張つたんだよ、中野なりに。それはチームの奴らには分からなかつたかもしれない。けど俺は中野が頑張つたつて知ってるから。その頑張りは嘘つく必要ないから」

向日葵「茅萱先輩…」

茅萱「戻ろう。インターンの閉会式が始まる」

茅萱、その場を去る。

○同・会議室・（夕）

インターン生が全員前に並んでいる。

福田、満里奈、茅萱を含んだ社員は会議室後方に座っている。

福田「どのチームもそれぞれ個性があつて非常に興味深かったです。今後とも皆さんの成長が楽しみです」

全員拍手する。

満里奈「福田部長、ありがとうございます。」

他の社員でコメントがある人いますか？」

茅萱、手を挙げる。

満里奈「茅萱君、どうぞ」

茅萱「先ほど部長が仰ったようにどのチームも个性的で良かったです。しかしその中でも私が一番褒めたいのは中野向日葵さんです」

向日葵「え？私？」

茅萱「彼女はコンサルという言葉の意味も知らない状態からのスタートでした。ですが、彼女ができる限りを尽くしたことでチームBは1位を取ることができたのではないかと思います。また、チームの皆さんもそんな彼女のことを一切責めることなく、一丸となって協力する姿勢が本当に素晴らしかったです」

岸田と根本、気まずそうにする。

向日葵「先輩！」

茅萱「チームBの皆さん、発表とても良かったです。お疲れ様でした。僕からは以上です」

向日葵と茅萱、見つめ合い笑う。

○同・出入口

向日葵、外に向かって歩いている。

茅萱、その後ろから歩いてくる。

茅萱「中野！」

向日葵「茅萱先輩！さっきはありがとうございました！
いました！」

茅萱「おう」

向日葵「このインターンに参加して本当に良かったです。コンサルってどんなものかとか、ライバルにはどんな人がいるかとかよくわかりました。あと私の力不足も……」

茅萱「そう」

向日葵「難しいですね、就活って。舐めてた昔の自分を殴りたい気分です。……今日までありがとうございました！私、帰ります。失礼します」

向日葵、浮かない表情で帰ろうとする。

茅萱「中野！中野はさ、コンサル本気でやりたいか？」

向日葵「……はい！本気でやりたいです！私のアイデアで誰かを満足させられる様になりたいです！なりたい、ですけど……」

茅萱「本気で入りたいんだろ？会社。なら中

野らしくがむしやらに頑張る一択だろ」

向日葵「：はい！そうですね！」

茅萱「まあ：俺も時間が許す限り、助けてやる」

向日葵「え！本当に良いんですか！？」

茅萱「おう」

向日葵「わぁー！茅萱先輩優しい！先輩、私また惚れ直しました！」

向日葵、茅萱と腕を組む。

茅萱「やめろって。そうと決まれば今日から

ビシバシ、みっちり鍛えてやる」

向日葵「えー今日くらい休ませてくれてもいい

じゃないですか？」

茅萱「ダメだ。そんな甘ったれた考えだから

メンバーから陰口言われるんだよ」

向日葵「みんなの前では守ってくれたくせに

ー素直じゃないなあ」

茅萱「それは違うって：」

○大学・図書館

向日葵、コンサル関連の本を開いてノートを取っている。

向日葵「今日はここまで」

茅萱からメッセージで“諦めたら試合終了。気を緩めず、頑張れ！”と来る。

向日葵「うう：スパルタだあ。でも力みなぎってきた！うし、150ページまで頑張る！」

○向日葵の部屋・（夜）

向日葵、眼鏡をかけて電話をつないでいる。

向日葵「準備万端です！質問バッチ来いです！」

茅萱、茅萱の部屋から電話に出ている。

茅萱「そいじゃいくぞ！人間が手作業で行っていた作業を自動化するAIやロボットと言えば？」

向日葵「デジタルレイバー！」

茅萱「正解！」

向日葵「やった！」

茅萱「じゃあ次！比較したい企業を決めて自

社との間の差を調査する方法は！？」

向日葵「えーと、ベンチマーク調査！」

茅萱「そうだ！」

向日葵「どんどん出してください！」

茅萱「では、中野の大学時代のあだ名は？」

向日葵「嵐女！」

茅萱「その通り！全問正解！」

向日葵「え、最後のはコンサルと全然関係な

くないですか？どさくさに紛れていじ

らないでください！」

茅萱「悪い、悪い。つい」

向日葵「もうー」

○川沿い・（夕）

向日葵と茅萱、川沿いの土手を二人で

歩いている。

茅萱「ついに来週だな、面接」

向日葵「はい、緊張するなあ」

茅萱「最後まで気抜かずに。あとは中野らしく自由にやって来い」

向日葵「はい！でも茅萱先輩と一緒に対策したから大丈夫な気がします。私、頑張ります」

茅萱「うん」

向日葵「あ！茅萱だ！」

茅萱「ん？」

向日葵、茅萱（イネ科の植物）が咲いているところに歩いていく。

向日葵「わあ。茅萱がいっぱい」

茅萱「イネ科の植物なんだよな、茅萱って」

向日葵、手で四角形を作り、カメラを撮るように茅萱に向ける。

向日葵「茅萱に囲まれる茅萱先輩。なんか面白いですね」

茅萱「だな」

向日葵「知ってますか？茅萱の花言葉って

“守護神”なんです」

茅萱「ふーん」

向日葵「私にとって茅萱先輩は守護神みたいです。だからたぶん今度の面接も大丈夫です。心配しないでください！」

○大学・道路

T「2025年7月」

向日葵（21）、自転車を押して“上を向いて歩こう”を鼻歌で歌いながら歩いている。

メール着信音がして携帯を取り出すと“コンサルティングファーム

『Force』”からメールが届いている。

向日葵の声「面接が終わり1ヶ月経ったその日、結果が届いた」

メールには“先日はお忙しいところ、当社の面接にお越しいただきまして、誠にありがとうございました。選考の結果、”と記載がある。

向日葵の声「春が終わり、夏がきて、茅萱の
花期が終わる頃」

メールには“採用を見送らせていただ
くこととなりました”と記載がある。

向日葵、前を向き速いスピードで呼吸
を繰り返す。

向日葵の声「現実はとても冷たかった」

向日葵「私：コンサルできないんだ」

向日葵、静かに涙を流す。

○道路・（夜）

茅萱と満里奈を含む社員が歩いている。

茅萱、携帯を気にしている。

茅萱「連絡まだか？」

満里奈「誰かからの連絡待ってるの？あー、

もしかして向日葵ちゃん？」

茅萱「俺はそんな、待ってるわけ……」

満里奈「あらそう。ならいいけど。自分から

連絡してみれば？私たち先行ってるね」

茅萱、立ち止まり向日葵に“結果どうだった？”と送る。

○居酒屋・（夜）

社員が楽しそうに飲んでいる。

茅萱、ぼーっとしてる。

福田「…神田君。神田君」

茅萱「はい？」

福田「君の番だ。神田君の好きなタイプの人
は？」

茅萱「ああ、俺は…元気で何やるか予想できない嵐みたいな人がタイプです」

福田「随分変わった趣味だな」

茅萱の声「中野なんか。中野なんか嫌いだったはずなのに。あいつがどうしてるか
気になって、心配で。俺どうかしてる」

満里奈、心配そうに茅萱を見ている。

茅萱の携帯に電話が来る。

満里奈「もしかして向日葵ちゃん？」

茅萱、立ち上がり電話に出る。

茅萱「中野。どうした？」

向日葵の声「茅萱先輩！こんばんは。お久しぶりです！」

茅萱「うん、久しぶり」

向日葵の声「：実は私、落ちちゃいました！

面接」

茅萱「え？」

向日葵の声「先輩がせっかく手伝ってくれたのにすみません：でも私大丈夫ですから！それだけです！失礼しました」

電話が切れる。

茅萱「中野、今どこだ？中野？中野？」

茅萱、立ち上がる。

茅萱「：すみません、俺用事できたので抜けます」

茅萱、急いで店を出る。

福田「おい、どこ行くんだ！」

○道路・（夜）

茅萱、走っている。

茅萱の声「あいつの声を聞いたとき」

茅萱、店の中を探す。

茅萱の声「あいつの悲しそうに笑う顔が浮かんで」

茅萱、息切れして止まる。

茅萱の声「一人にしちやいけないと思った」

茅萱、また走り出す。

茅萱の声「泣かせたくなかった」

○川沿い・（夜）

茅萱、川沿い近くまで来てスマホのライトで辺りを照らす。

茅萱の声「この感情がなんだか訳わかんないけど、ただ一つ確かなのは」

茅萱「中野に会いたい、会いてえよ」

茅萱、向日葵が見つからず諦めそうになる
と向日葵がいる。

向日葵「茅萱、先輩？」

茅萱「中野……」

× × ×

向日葵と茅萱、川沿いを二人で歩いている。

向日葵「わざわざ探してくれましたか？嬉しい」

茅萱「俺はさ、その、中野が川におぼれてんじゃないかって心配だっただけで」

向日葵「ふふ。ありがとうございます」

茅萱「…中野、俺…」

向日葵「長い間、私の就職活動に付き合わせてしまい、すみません。でもこれから心配かけることはありません」

茅萱「は？それってどういう…」

向日葵「これからは会うことも迷惑かけることもありませんから安心して下さい」

茅萱「じゃ、じゃあ、これからは食堂で付け回されることも面接の練習付き合わせれることも無いってことだよな？」

向日葵「はい！もうありません！」

茅萱「あーやつと自由か。良かったー」

向日葵「茅萱先輩。今までありがとうございます。
ました！それじゃあ、お元気で。さよ
うなら！」

向日葵、悲しそうに家の方面に向かう。
茅萱の声「あんなこと言いたかったわけじゃ
ないのに。本当はあいつのこと引き留
めたかったのに。俺にはあいつの背中
を見つめることしかできなかった」

○会社・オフィス

T「2030年8月」

茅萱（28）、デスクに座っている。
満里奈（30）、一人の社員を連れて
くる。

満里奈「こちら、新しく入った新入社員」

社員「初めまして！よろしくお願いします」

茅萱、驚いて立ち上がる。

茅萱「中野！？」

社員「え？」

茅萱「すみません、人違いです」

茅萱の声「俺はあれから新しい社員が入るたび中野のことを思い出す」

満里奈「そろそろ次進んでもいい頃じゃない？」

い？」

茅萱「わかってます」

茅萱の声「口では言えても、心は前に進まない」

福田（59）、茅萱のところに来る。

福田「神田君。来週から『Kenrei』株式会社との合同案件が始まる。準備進んでるか？」

茅萱「はい。見積もりを作成中です」

福田「そうか」

資料にはコンサルティングファーム

『Kenrei』の文字が記載されている。

○道路・（朝）

茅萱、道端を歩いていると蝶が目の前を通り、向日葵の花に止まる。

茅萱「向日葵」

茅萱の声「2030年の夏。まっすぐ俺を見
つめる向日葵を見るたびあいつを思い
出す」

○『Kenrei』株式会社・廊下

茅萱、会議室の前で深呼吸する。

茅萱の声「けど俺は前に進むために歩かなきゃならない」

茅萱「よし、行くぞ」

茅萱、会議室のドアを開ける。

○同・会議室

茅萱、部屋に入る。

窓の外から強い日差しが入り、相手の顔が見えない。

茅萱「はじめまして、コンサルティングファ

ーム『Force』の神田茅萱です」

向日葵「こんにちは。コンサルティングファ

ーム『Kenrei』の中野向日葵です」

茅萱「中野…向日葵…」

茅萱、顔を上げると向日葵（26）が
会社員らしい格好で立っており、胸に
は向日葵のブローチを付けている。

向日葵「この日まで、頑張った甲斐がありま
した。やっと一緒に働けますね、茅萱

先輩！」

茅萱「…ばーか。遅すぎるんだよ」

茅萱、向日葵の頭をくしゃくしゃと撫
でる。

二人は見つめ合いながら笑っている。

おしまい